

令和元年度中学校武道授業（銃剣道） 指導法研究事業



実際に防具を着けた指導者の左胸を突く体験

令和元年度中学校武道授業（銃剣道）指導法研究事業〔主催＝日本武道館・全日本銃剣道連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、協力＝大多喜町立大多喜中学校（千葉県）〕が、12月6日から8日の3日間、千葉県勝浦市の日本武道館研修センターにおいて実施された。

スポーツ庁が今年度から実施している、外部指導者を活用した複数の武道種目を選択する「武道推進モデル校」に指定された4校（新潟・富山・滋賀・茨城）の例から、今後のさらなる武道推進モデル校の拡充に向け、全日本銃剣道連盟が作成した授業指導案を検討。大多喜町立大多喜中学校の生徒（14名）の協力を得て、模擬授業を展開した。

■初日（12月6日）

開講式では、主催者として、鈴木健^{たけし} 全日本銃剣道連盟副会長兼専務理事が挨拶に立ち、「今年、念願であった中学校の銃剣道授業が、モデル校として4校実施できた。この冬には北海道の名寄でも実施予定である。本研究事業において、協議・検討を重ねてきた結果と感じている。今後は道場や授業、また部活動までを含めた指導書を作成するので、その際に本研究事業から多分に取り入れるべき要素があると感じている。研究者には引き続き協力をいただきたい」と述べた。

続いて、三藤芳生^{みふじよしお} 日本武道館常任理事・事務局長が挨拶を行った。「本研究事業も今回で10回目を迎えた。鈴木副会長をはじめ、研究者による研究の積み重ねにより、今年度は外部指導者を活用した複数種目モデル実践校が4校もあった。是非、来年度以降も、新しい都道府県でモデル校の実践ができるような情報交換や協力体制をお願いしたい。また、2021年度から全面実施される新しい中学校学習指導要領の保健体育に武道9種目が並列明記されるので、それまでにできるだけ多くの都道府県において実施校を増やしていただくとともに、銃剣道は、安全で楽しく効果の上がる武道であるということを中学生の皆さんに体験してもらいたい」。

開講式終了後は、武道編DVDを視聴し、翌日の模擬授業の展開について話し合いを行った。今回の目的は、武道推進モデル校において外部指導者を活用した授業を“体験”と位置付け、全日本銃剣道連盟が作成した2時間用と3時間用の指導案をもとに、銃剣道の歴史や特性、礼法などをいかにして限られた時間の中で効率良く指導することができるかということ念頭に検討を行った。研究者からは「2時間の場合には、目標物を突く動作を多く取り入れた方が良いのではないか」、「実際の技を見せてあげることにより授業の目標を明確にした方が良いのではないか」、「用具の説明は最初にDVDを視聴させれば、口頭での説明は割愛できるのではな

いか」など、様々な意見が出された。その後、出された意見をもとに内容の構成、指導のポイントなどの確認を行い、1日目を終了した。

■2日目(12月7日)

2日目は、大多喜町立大多喜中学校剣道場に場所を移し、模擬授業を行った。午前は2時間用の指導案に基づき進行。午後は3時間用の指導案の中から2・3時間目のカリキュラムを取り入れ、それぞれT1を宮内佑輔研究者、T2を千葉隆研究者、T3を田村聖一研究者が担当した。午前は、まずDVD視聴によって基礎知識から基本動作(構え・直れ)までのイメージを掴ませた後、実際に木銃を持って気をつけの姿勢や構え、直れを指導した。その際、一連の流れの中に座礼も取り入れることで所作の定着を図った。その後、「直突」では新聞突きやボール突きなど目先を変えて指導し、「足さばき」では足さばきリレーを取り入れるなど、生徒が楽しく取り組める授業を展開した。足さばきを交えた新聞紙突きでは、石川慎也研究者から「突く時だけでなく、抜く時も真っ直ぐ抜かなければならない」とヒントを与える場面もあった。研究者の突き部位の左胸を突かせる場面では、生徒は新聞紙やボールを突く時とは異なる体感をしているようであった。

午後は、踏み込みの応用としてボール突きによる的当てゲームを行い、各グループで点数を競った。その後、足さばき(左右、開き足)を理解させるために、滝沢元氣研究者がホワイトボードに足の動かし方を図示し、グループ対抗の足さばき演技発表に備えた。演技発表では、各グループで号令をかける者や演技の隊形などを話し合わせるのと同時に、他グループの演技を評価する際のポイントを示すことにより、自分たちの演技への留意点を促した。最後に、研究者による試合を披露すると生徒たちは固唾を飲んで見守っていた。

終了後は、研修センターへ戻り、模擬授業の検討協議を行った。各研究者の感想は以下のとおり(抜粋)。

- 石川研究者:新聞突きやボール突きは生徒の目が輝いていた。積極的に取り入れていくべき。
- 滝沢研究者:見本を最初に入れても良かったのではないか。生徒の集中力が切れた時の言葉かけが足りなかった。
- 菊池 聡研究者:注意を促す際、まとめてするのではなく分散させても良いのではないか。
- 清水陽介研究者:できない時に一度集め、できない



原因を考えさせても良かったのではないか。

●田村研究者:指導案の中にいくつかの教示内容をパターン化し、それらを指導者が組み合わせて構成できるようなカリキュラム作りが必要ではないか。

●千葉研究者:本日の生徒数だと指導も目が行き届くが、多数になった際の展開が課題。

●宮内研究者:時間配分を見誤った。的当てゲーム以降、生徒の集中力が途切れたが修正が難しかった。

●衛藤敬輔職員:外部指導者は生徒5名に対して指導者1名ぐらいが適切ではないか。時間配分については、外部指導者と綿密な打ち合わせが必要と感じた。

◇アンケート結果(まとめ)

終了後に行った中学生へのアンケート調査では、「最後に行った先生の試合が印象に残った」、「構えの状態を保つのが辛かった」という感想が多く寄せられた。この点について研究者からは、前者は、銃剣道を知らない子どもたちに見せてあげることができて良かった。後者は、指導方法に改善の余地があるとの意見があった。

■3日目(12月8日)

最終日は、2022年に刊行予定の少年少女指導書の作成にあたり、外部指導者の部活動への関わりについて、現在、顧問として部活動を受け持つ、また受け持ったことのある研究者と協議を行った。

閉講式では石川慎也研究者が講評を行い、全日程を終了した。

